

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 85 号

2020 年 9 月

来年の年会に向けて：Zoom会議を通して得られたこと

会長 森本和滋

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的な感染拡大の中、我が国の感染状況もなかなか落ち着きません。7月15日に開催した Zoom での第1回常任理事会にて、松崎年会長と船山日本薬史学会・柴田フォーラム委員長の思いを直接聞いて、WG の答申通り、満場一致で正式に延期を決定いたしました。

密を避けて Zoom での第1回の常任理事会を、小清水新総務委員長と安土総務委員のお世話で開催することが出来ました。即ち、7月14日12時半からの Zoom 会議プレ・テストと、15日10時からの第1回 Zoom 常任理事会です。

Zoom ミーティングに参加するには、通知頂いた① URL にクリックする方法、② ミーティング ID とパスワード、で参加出来ます。若い世代の方には比較的簡単なことですが、私たちの世代では、助けて頂かないとなかなかうまくアクセスできません。マイクやスピーカーの音声不具合で入口で戸惑う方もおられました。それらのトラブルを安土委員がプレ・テストで助けて下さり、おかげで新テクノロジーに馴染んで行けたことを嬉しく思っております。

二日間の Zoom 会議で参加された延べ18名の方々がそれぞれの立場から忌憚ないご意見を頂いたことをご報告申し上げます。名古屋から河村常任理事も2日間参加頂きました。これも Zoom 会議のメリットと考えております。

今年度は、薬史レターを3回刊行することも決まりました。早速、15日夕方、齋藤編集委員長から「冒頭ページに会長からのメッセージを」との原稿執筆依頼メールが届きました。会員各位におかれましては、本号をお読み頂き、松崎年会長と船山委員長の思いをご理解いただき、来年の年会とフォーラムに気持ちを切り替えて、ご準備いただきますと幸甚です。今年発表を予定されていた方は、齋藤編集委員長の救済策の説明に在るように、是非、薬史学雑誌の「記事」に短くその発表を執筆され、研究報告の業績リストとして活用頂けたらと思います。

また、人ごみを避けての自粛、新しい生活様式の結果得られた時間を格好のチャンスと捉え、長らく暖めていた原稿を、薬史学雑誌の投稿原稿にまでに仕立て上げて頂ければ幸いです。

編集委員会からのお知らせ：年会延期に伴う薬史学雑誌での取り扱いについて 編集委員長 齋藤充生

今回の年会延期によって、今年度の一般口頭・ポスター発表の機会が無くなった方への対応として、常任理事会で検討の結果、薬史学雑誌の「記事」区分への寄稿を受け付け、将来、内容を充実させて原著等の別論文として投稿することを妨げない(適切に処理されていれば二重投稿としない)ことといたしました。特に学生指導等で、今年度中に発表を行う必要がある場合にご検討ください。「記事」の作成要領については、投稿規定をご確認ください。もちろん、学会発表には、口頭であれ、ポスターであれ、聴衆との双方向の議論によって磨かれ、新たな視点につながる醍醐味があります。発表の延期が可能な方は、内容を吟味して、来年度の学会発表に備えていただくこともお勧めいたします。

2020年 学会年会および柴田フォーラムの 来年への延期に関するお知らせ

日本薬史学会

新型コロナウイルスの感染状況がなかなか落ち着きません。本学会の重要な催しである上記の2つについて来年に延期することにしました。

特に年会については、3人の常任理事によるワーキンググループによって慎重に検討しました。開催する、誌上発表の形で開催する、そして来年に延期する、3つのパターンについて討議しました。

結論は、現在の様々な情報、とりわけ感染発症が収まらない、会場の使用が可能か、参加者の動向などの問題点があがり、10月開催の年会あるいは誌上開催は無理ではないか、として、来年に延期することが現時点では最も合理的で安心して運営・参加

などができるものとして、会長に答申しました。

7月15日に開催した常任理事会にて検討した結果、答申通りにすることを満場一致で正式に決定いたしました。

会員各位におかれましては、このことをご理解いただき来年に向かってご準備などをしていただきますと幸甚です。

詳細については、今後のホームページ、薬史レターなどに掲載する予定ですのでご覧ください。コロナ感染に十分にご留意していただき、来年の本会の各種催しものに是非ご参加ください。

中部支部だより

中部支部例会講演会の開催予定と演題募集

中部支部長 河村典久

1 中部支部例会開催のご案内

- ・開催予定日時：2021年2月6日(土)午後2時を予定しております。
- ・会場：前回と同様、金城学院・栄サテライト(〒460-0003 名古屋市中区錦三丁目15番15号CTV錦ビル4階(セントラルパーク地下街10A出口前))を予定しています。

なお、現在、金城学院栄サテライトの存続の可否が検討されていること、および新型コロナウイルス感染が心配されていますので、変更または中止になるかもしれませんが、その場合には、改めて薬史学会ホームページにてお知らせします。

2 演題募集

例会での演題をお待ちしております。講演ご希望の会員の先生は令和3年1月31日までに、中部支部事務局までお知らせください。

・中部支部事務局

中部支部事務局長 飯田耕太郎 名城大学薬学部 薬学教育開発センター 教育開発部門

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL : 052-839-2710 (直通) FAX : 052-834-8090 E-mail : iida @meijo-u.ac.jp

年会延期と次期年会開催に向けて

日本大学薬学部 松崎桂一

日本薬史学会2020年会をお世話することになっておりました日本大学薬学部の松崎です。

新型コロナウイルス感染症の流行が収まる気配のない中、最後まで開催を模索しておりましたが、本年度の開催を見送ることになったのは甚だ残念でなりません。しかしながら、参加される会員の皆様の健康、並びに日本薬史学会として社会的に責任ある立場でもありますので、皆様にはご理解いただきますよう、お願い申し上げます。このような中でも森本会長はじめ、常任理事の先生方からのエールもあり、仕切り直しで次年度に向けて準備させていただくことになりました。開催場所は日本大学薬学部校舎を予定しております。

本学部は、昭和27年(1952年)に工学部薬学科として産声をあげ、昭和63年(1988年)に薬学部として現在の地に分離独立しました。工学部(現在の理工学部)に設立されたのは、医療人としての薬剤師ではなく、製薬企業などでの医薬品製造、管理、試験などの領域で活躍する人材を育成することを主眼に置いたためです。このような意味では他の薬学部、薬科大学と設立当時の理念が異なり、歴史的に大変ユニークだったと思います。

設立当時から昭和49年まで、生薬学研究室の教授として木村雄四郎先生が主宰され、生薬学を通じた教育研究を行って参りました。先生は本学会でも尽力されましたのでご記憶の先生が多数いらっしゃると思います。

創立60周年を機に、本学の史料展示スペースが作られ、植物園内に設置された生薬標本室には、設立当初から収集された生薬並びに押葉標本が展示保管されています。年会期間中、こちらも見たいと思います。

2021年会は、現在のところ下記の通りに準備を進めております。

日本薬史学会 2021 年会

日 時：令和3年10月23日(土曜日)

場 所：日本大学薬学部校舎 (千葉県船橋市習志野台7-7-1)

東洋高速鉄道(東京メトロ東西線と相互乗り入れ)船橋日大前駅 徒歩7分

地下鉄東西線大手町駅(東京駅から徒歩3分)から約37分

特別講演(2題、うち1題は一般公開を予定)

一般講演(口頭、ポスター)

意見交換会

薬史ツアー

日 時：令和3年10月24日(日曜日)

伊能忠敬の半生を訪ねて

隠居されてから大日本地図の作成に日本中を廻られた伊能忠敬を小江戸佐原にある伊能忠敬記念館の見学と街中散策を予定しています。

当初、特別講演は本学に残る木村雄四郎先生の足跡と、千葉県郷土の出身の伊能忠敬の話を用意しておりました。今回の新型コロナウイルス感染症の関係上、プログラム等に変更が生じた場合はご容赦ください。

今回の状況が、好転することを信じて止みません。

皆様、来年度は本学でお会いし、活発な討論、意見交換ができることを楽しみにしております。

日本薬史学会・柴田フォーラムについて

日本薬史学会常任理事・柴田フォーラム委員長 船山信次

新型コロナウイルスの跋扈により、2020年度の柴田フォーラムは中止となりました。会員の皆様には、時節柄やむを得ないこととご了解いただきたく存じます。なお、これまでは「柴田フォーラム」と称していましたが、常任理事会の了承を得、今後は「日本薬史学会・柴田フォーラム」と称することになりました（以下フォーラムと略させていただきます）。

これまでの12回のフォーラムは主に東京近辺（第7・9回はそれぞれ、京都・金沢）での8月初めの開催でしたが、今年のフォーラムは晩秋の11月末を目処に関西で開催したいと考えていました。しかし、たとえ講演会は出来ても講演後のビアパーティ（情報交換会）はとうてい不能で、今年度は残念ながら開催を諦めざるを得ないと判断いたしました。

このフォーラムはかつて「集談会」として行われていた勉強会の再現であり、日本薬史学会第5代会長の山川浩司先生のご提案でした。そして、その名称には1991～2004年まで第4代会長をされた柴田承二先生（1915～2016/東京大学・明治薬科大学名誉教授）のお名前を冠しています。初回は2008年8月5日（火）に柴田先生が「わが国の薬学の始まりへの回想と私の辿った道」（薬史学雑誌，**43**, 122～127（2008））と題してお話しされました。

柴田先生は奈良東大寺正倉院薬物との出会いがその後の研究方針に大きな影響を与えたとのこと（柴田承二、薬学研究余録. 白日社、2003年、147～156頁）。正倉院の成立は756年（天平勝宝八歳）のことであり、収蔵品リストの『種々薬帳』には60種の生薬の記載があります。そのうち何と38種が現存し、これらの薬物はまさにわが国の至宝といえましょう。

戦後の正倉院薬物の学術調査は2回行われました。その第1回目は朝比奈泰彦先生（1881～1975/東京大学名誉教授）を首班として行なわれ、この時に若き柴田承二先生も班員として参加されていま

す。その成果は、『正倉院薬物』（植物文献刊行会、1955年）として刊行されました。朝比奈先生は、日本薬史学会の創始者であり（「薬史学雑誌」の表紙の揮毫もされている）1954～1975年の間、初代会長を務められました。第2回目の正倉院薬物の調査に際しては柴田承二先生が首班となり、その成果は『図説正倉院薬物』（中央公論新社、2000年）として刊行されています。

なお、第10回目のフォーラム（2017年）では、柴田先生の後任として明治薬科大学教授（後に同大学学長・理事長）となられ、第2回正倉院薬物調査にも参加された奥山徹先生に「柴田承二先生との思いを語る」（薬史学雑誌，**52**, 112～117（2017））としてお話しいただきました。

私は、柴田先生の正倉院薬物についての英文総説執筆に関与するという大変光栄な経験をしたことがあります。すなわち、柴田先生が先に正倉院収蔵の人参・大黄・甘草の化学成分について「植物学雑誌」に報告された3本の和文論文を私が英文総説草案にまとめたのです。米国留学時の恩師 G. A. Cordell 教授が私の書いた英文をチェック、最終的に柴田先生が全体を校閲されて完成しました（S. Shibata, *International Journal of Pharmacognosy*, **32**, 75-89（1994））。Cordell先生と小生の名前はこの総説論文の Acknowledgements にあります。

このプロジェクトは大阪で開催された日本薬学会の折に来日された Cordell先生と柴田先生との会場での会話で生まれたとのこと。私はそんな話が進んでいるとは露知らず、その時間は学会会場を抜け出して、奇しくもなんと「正倉院」の拝観に出かけていました。実は、この総説論文への関与が私の気持ちを本格的に薬史学の世界へといざなう機会となったのですからおそるべし「正倉院薬物」。

次回のフォーラムは是非晩秋の関西で開催できないかと模索しているところです。

名誉会員就位と薬史学会での歩み

西川 隆

この度は伝統ある日本薬史学会の名誉会員に推戴を賜りました。6月11日小清水敏昌総務委員長および安土昌一郎委員がコロナ禍のなか、わざわざ私の住む横浜戸塚までお出でになり、推戴状を戴きました。心からお礼申し上げます。85歳を迎え微力ですが、学会発展に尽したく考えております。

この機会に私の薬史学会での歩みを振り返ってみます。入会は確か1987年です。その頃の私は、塩野義製薬に勤務していましたので、薬史学雑誌に掲載された製薬企業・医薬分業・薬学教育の歴史に関する論文を読む程度でした。初の口頭発表は定年退職後の2004年会です。演題名は「医師と協同で実践した臨床薬学小史」でしたが、余りにも個人史過ぎると判断し第1報で止めました。薬史学雑誌には「明治末期から近代的欧州式プロパガンダを実践した最初の日本人MR二宮昌平薬剤師の素顔」(42巻2号2007)、「戦後昭和の歴代日本薬剤師会長の事績に関する一考察」(43巻2号2008)が掲載されました。

単行本として2004年に『くすりから見た日本～昭和二十年代の原風景と今日』を、2010年には『くすりの社会誌～人物と事績で読む33話』を出版、前著は評議員の山崎幹夫先生(元新潟薬科大学学長)から日経サイエンスで、後著は山川浩司会長から「薬史レター」で、宮本法子理事から「薬事日報」で過分な紹介を戴きました。

2004～2006年に共立薬科大学大学院非常勤講師を勤めた後、山川会長(故人)と三沢美和副会長からのお話で引き受けました評議員(2008～)、理事(2011～)、常任理事「薬史学雑誌」編集委員長(2014～2018)を夢中で務めました。薬史学雑誌を査読者

2名による査読誌としての礎を築くことができ、また、投稿規定を改訂しバンクーバー方式を採用しました。

2012年には理事の中村健先生(故人)らと共著で『医薬分業の歴史』を、2016年に学会創立60周年の記念事業で『薬学史事典』を出版しました。事典では奥田潤先生と編集代表を務め、全会員のご協力でその責めを全うできました。この事業で「日本薬史学会賞」を戴き大変光栄に思っています。この間、2012年の五史学会では「MRの歴史 日本最初のプロパー誕生から百年」を報告しました。

常任理事を退いた後は、年会での発表を心掛けています。2018年会(新潟)で「オランダの薬剤師H.ビュルガーのわが国薬学史上の意義に関する一考察」を、2019年会(岐阜)では「大正期の医薬分業にみた河合操の薬局国営論に関する考察と検証」(工藤義房先生と共同研究)と「医師シーボルトと薬剤師ビュルガーの日本における私的生活の一断面」の2題を口頭発表しました。2020年3月に『東京帝国大学医学部薬学科 人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦』を上市し、本書に関する「解説」を齋藤充生評議員(現常任理事)にご執筆戴き、本書の持つ意味合いや位置づけなどを示して戴きました。4月名誉会員に推戴され、現在に至っています。

今後は年会出席を心掛け、できれば演題報告、論文化のほか、薬学教育に関する歴史の著作活動も続けたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。



薬史学雑誌のJ-STAGE掲載について

薬史学雑誌(Yakushigaku Zasshi)のJ-STAGEへのバックナンバーの掲載を開始しました(8月末時点で約5年分)。表示は和英切り替え可能で、論文単位の掲載となっております。J-STAGE利用規約に従ってご活用ください。

日本語 : <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjhp/-char/ja>

English : <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjhp/-char/en>

教科書作成に関する進捗状況

教科書作成実行委員長 小清水敏昌

「教科書作成実行委員会」活動の現況をご報告いたします。昨年5月に委員会がスタートし概ね2か月ごとに検討を重ね、本年3月の第6回の委員会で項目および執筆候補者など重要な事柄を決定しました。これらについてご紹介します。

まず、教科書の名称を「薬学史入門」としました。既に2016年に『薬学史事典』が刊行されているため、これのエッセンスを纏めたような形にしました。内容は、大項目として5章(薬学を過去から学ぶ、薬学教育の歴史 薬剤師の歴史 製薬産業の歴史 薬事制度の歴史)に区分。各章ごとに(中項目)を設け全22項目とし、これに対応する執筆者(本学会員)26名

に執筆をお願いしました。付録は3つで、本書を補足するために「主な薬学史関連の参考書」を紹介し、また全国にある「くすり博物館」を掲載し、見学などを通し少しでも歴史に興味を持ってもらえればと考えました。それと「年表」です。本書のコンセプトは薬学を初めて学ぶ学生に歴史上の事実や面白さを知ってもらうこととし、価格も安価にして理解しやすい教科書にするつもりです。発行は来年3月開催予定の日本薬学会年会(広島)までを目標としています。

薬学史の教科書が無い現在、全国の薬科大学・薬学部において本書を取り上げていただき、また会員の方々も是非手にしていただきたいと願っています。

〔Book紹介〕

西川 隆 著

「東京帝国大学医学部薬学科—人物と事績でたどる「宗家」の責任と挑戦」

A5版 245頁 3,000円(薬事日報社)

本書は、西川隆名誉会員の執筆で2020年3月刊行された。副題の『「宗家」の責任と挑戦』が興味をそそるタイトルです(写真)。

7章から構成され「学術独占を進めた講座制と学位授与権」、「薬学振興論と草創期のエリートたち」、「世界に伍す2代目教授と門下生たち」、「民主化で帝国大学の特権消失、平等へ」と我が国の薬学の変遷を感じさせる興味ある章題となっている。

第3章4節の『「宗家」を離れ活躍したエリート先駆者』は、薬剤師の地位確立に貢献された高橋三郎、池口慶三、安香堯行、酒井甲太郎の明治、大正、スピリットに感動を覚えた。

第6章6節「石館守三教授—新薬創製と日薬会長などの社会貢献」の179～188ページでは、「宗家」を代表する不世出の指導者であったことを贅えている。「特に、日薬会長時代は医薬分業を軌道に乗せた足跡は忘れられない」と結んでいる。

本書の特徴として、人物写真(九十余名)の多さ

をあげたい。朝比奈泰彦初代会長を筆頭に、野上寿、柴田承二、宮木高明、辰野高司等本学会の大先輩。当方が1970年代に出逢った恩師、学長、所長、1980年代の研究班長、1990年代の各種委員長を思い出し、

感謝して、懐かしむ機会を与えてくれる本でもある。

本書の最後には、齋藤充生評議員(現常任理事)の解説がある。「これまでも幾度となく試練を乗り越えてきた「宗家」が、先達の知恵と勇気と経験に倣い、どのように進化を遂げ、難局を切り拓いていくか、見守っていきたい」と期待を込めた言葉で纏めている。

6月15日山田光男名誉会員から美しい朝顔のお葉書に「Book紹介執筆下さる様お願い致します」とのご依頼を頂き、門外漢では御座いますが、敢えて執筆させて頂きました。(森本和滋)



高橋京子 著

「緒方洪庵の薬箱研究 マテリアルサイエンスで見る東西融合医療」

B5版 上製 292頁 25,000円 (大阪大学出版会 2020年2月発行)

緒方洪庵は幕末を代表する蘭方医として活躍した。著者の高橋京子氏は長年、緒方洪庵の薬箱中の生薬類について様々な角度からその実態を研究・解明してきた。本書はその研究成果を集大成したものであり、約150年前に洪庵が往診に携行した薬箱は壮年期と晩年期の2種類が現存し、薬箱に入れた生薬類はその時代や洪庵の長年の経験と共に変化があった。薬箱に遺された生薬類とその基原植物を美しいカラーデジタル映像化している。薬箱にある生薬を、壊すことなく調査・分析したことは、困難を伴ったであろうと考える。これらは文化財のため、より慎重な作業を求められ、非破壊的な方法を用いながら地道に解明していった著者の多大な努力に敬

意を表する。

本書は5章に区分され、洪庵と臨床薬学、壮年期の薬箱、晩年期の薬箱、東西融合療法、恒久保存のテーマになっている。ページを捲ると真っ先に目に飛び込んでくる薬箱のカラー写真に圧倒され、件の薬箱の小さな世界やその時代に誘われるロマンさを感じる。薬学関係者はもとより歴史に興味のある方々をも納得させる濃厚な内容である。



(小清水敏昌)

K.C. Nicolaou and T. Montagnon 著

「Molecules That Changed the World」

23.6 × 30.2 cm 385頁 \$ 59.25(¥ 5,567) (Wiley-VCH 2008年)

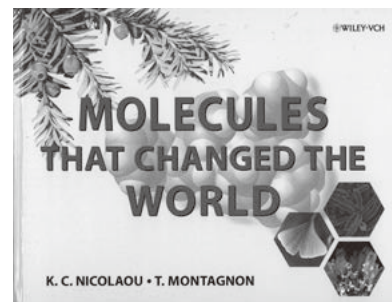
本書は、合成化学を専門とする K. C. Nicolaou 氏らによる「世界を変えた分子」の物語である。厚さ3 cm超の横長で見開くと肩幅以上のスペースが必要となり、存在感は抜群だ。本書の物語は尿素の発見に始まり、バンコマイシンなどの天然由来の医薬品、現代のバイオ医薬品に至るまで、世界を変えた分子が時系列に沿って40余り登場する。新規分子の発見の経緯、単離・構造決定における紆余曲折、化学合成の妙、実用化における秘話などが、時代背景、携わった科学者の人となりや言葉とともに物語として綴られている。多くの日本の先輩方がキーパーソンとして活躍されたことも窺い知ることができる。化学構造式や合成スキーム、挿絵はどれも洗練されていて美しい。理解を深めるための参考文献情報も充実している。

巻末の人物索引によれば、著者 K. C. Nicolaou 氏

は本文中で合計16回も登場し、最頻出である。著者本人が先見の明を持って「世界を変

えるであろう分子」に着目しその全合成研究に第一人者として携わってきた証であり、本書の内容の奥深さの所以でもある。

英語を母国語としない私にとっては、本書の洗練された英語表現にも学ぶところが多く、薬学英語教育の一環として、研究室配属の学生と一緒に本書を輪読している。



(友原啓介)

薬史往来 九大病院堀岡正義薬剤部長のあゆみ

名誉会員 山田光男

はじめに

堀岡正義先生（以下堀岡先生）は1963（昭和38）年から、九大病院薬剤部長に就任され、24年間勤務された。堀岡先生が九大に赴任する前に東大薬学科に製剤学講座が新設された。

米国薬剤師協会使節団の来日

1949（昭和24）年夏に米国薬剤師協会使節団が来日し、薬学教育、製薬企業など広範囲に調査を行い、有機化学中心の日本の薬学に対して調剤学分野で「理論的、調剤学的薬学ならびに生化学、薬業倫理」を強調する勧告を行なった。堀岡先生が所属する東大病院の野上壽薬局長は、大阪大学病院薬局長から転勤されて間もない頃で、東大医学部薬学科に講座もない状況であった。当時は終戦間もない時期で、使節団の要望に応えるのは無理であった。当時東大病院薬局に居られた堀岡先生は、当使節団の詳細をご存知なかったと思われる。

東大薬学科に製剤学講座新設

1951（昭和26）年7月に東大医学部薬学科に製剤学講座を開設したが、野上教授だけの予算で助教授、助手もいなくて、病院薬局からの応援で講義を行う状況であった。

九大病院は薬史学の宝庫

堀岡先生は著書で語っておられる。「九大病

院薬局の旧館は1925（大正14）年に出来た大きな独立した建物で大理石の階段には威厳を覚える。薬史的に貴重な資料も多く歴史と伝統の重みを感じる。」著者も堀岡先生を訪ねてこの大理石の建物を訪れたことがあるが、さすが旧帝国大学の建物であると感激したことを覚えている。九大病院初代薬局長の酒井甲太郎について、堀岡先生は史料の中で「酒井先生は1903（明治36）年東大薬学科を卒業して京都帝国大学福岡医科大学薬局長を勤務され、薬局内の配置、調剤機器の整備などに努められ、その調剤訓は有名である」と述べておられる。

(財)日本中毒情報センター (JPIC)

堀岡先生は医学部の最終講義に「中毒医療と中毒情報」というテーマを選んだ。医学と薬学の接点にある「日本中毒センター (JPIC)」はその成立までに9年間を要した。JPICの主な業務は、薬物中毒の問い合わせに対する回答と情報収集、データベースの構築である。地下鉄サリン事件ではJPICに蓄積された情報が多大に貢献したという。

むすび

以上の報告は、堀岡正義、西川隆両先生の著書を参考にさせて頂いた。各位のお役に立てば幸いである。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 荒木 二夫 小林 哲

薬史レター 第85号 2020年9月

編集人：齋藤 充生 発行人：森本 和滋

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください